

ともに考え
ともに学び
できるものから実践

新たな交流・連携の道を考える

八十里越フォーラム



どうにかなる。誰かがやってくれるのではなく…。佐久間所長



会津と越後のつながりの深さを話す馬場さん



あいさつをする五十嵐会長



八十里越え開通は町民の長年の夢

3月8日只見地区センターで第10回八十里越フォーラムが開かれ、約150人が参加しました。主催者代表あいさつで五十嵐

辰男只見地区センター運営委員
会長は「今回から只見・朝日・明和地区センター運営委員会が連携してフォーラムを開催することになりました。これから三地区合同で早期開通に向けた活動や、沿線町村との交流を図っていききたいと思います」と述べました。

フォーラムは、馬場惇さん（蒲生）が「八十里越の歴史から学ぶ」をテーマに、佐久間賢一南会津建設事務所長が「国道289号八十里越 会津、越後 新たな交流・連携の道を考える」をテーマに講演しました。

講演で馬場さんは、縄文時代から只見と新潟の交流があったと推測できることや、大正3年に磐越西線が開通するまで八十里を越えて人や馬や物が行き交っていたこと等を歴史史料により紹介しました。

佐久間所長はスライドを使い分かりやすく講演し、「八十里越が整備されると、只見から新潟空港や大きな病院へのアクセスが改善する」と述べました。また、「甲子道路が開通したことにより下郷町の休日の交通量が約2倍になり、観光客が増加し商店などがにぎわった。反面、渋滞が起きたり、地域の受け入れ態勢が整っていなかったり課題もできた。八十里越も開通すると同じ問題が起こると思われる。今から観光客を地域に止めたり、留めたりできるように考えてはどうか」と提言。さらに、景観づくりや地域資産に磨きをかけることの大切さを山形県金山町の例をあげ解説しました。

そして「生産・加工・販売の連携、地域内の連携と町内の連携など、様々な連携と交流のあり方を考え、『どうにかなる、誰かがやってくれる』ではなく、『ともに考え、ともに学び、できるものから実践』することが大切」と結びました。

フォーラムには、国土交通省長岡国道事務所から武江義則副所長ほか2人、三条市役所から土田壮一建設部長ほか2人、南会津建設事務所職員も出席しました。